

公 民 [倫 理] (100 点 50 分)

2012年5月29日(火)2限 実施
前期中間考査
千葉県立長生高等学校 第3学年 ABCD組
Edited by K.Kataoka

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 解答用紙はマークシート式です。
- 3 受験番号はアルファベットを数字に直し、次の例のように5桁で記入してマークを忘れないこと。
例 3年D組1番 → 30401
- 4 試験中に解答用紙の不足、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 5 試験終了後、問題冊子は持ち帰って復習をするとともに、答案返却の際に持参すること。

倫 理

(解答番号 [1] ~ [50])

第1問 次の文章を読み下の問い(問1~問3)に答えよ。(配点 8)

ギリシャの市民たちは、政治を行うための民会(市民の会議)や宗教的行事に参加し、ポリス間の対立や抗争のときには、戦士としてポリスを守るために戦った。市民の生活と自由はポリスの安全と平和のうえに成り立つものであったため、人々は利己心をおさえ、調和と秩序を重んじる考え方を育てていった。

この立場は彼らの世界観にもあらわれた。[1]は美しい調和をなしており、人間についても、心身ともに健全で、本来備えているさまざまな才能を調和的に完全に開花させることが幸福であり、美であるとされた。そして、それぞれが分を守り、他を侵さないという正義をわきまえ、善と美の調和がとれていることが市民の理想的生き方であった。

ギリシャにおいて、(a)人間としての生き方や世界の形成は、まず神話によって説かれた。神話の世界を通して、人間のあるべき姿を求めたのがホメロスである。彼は、『イリアス』や『オデュッセイア』をあらわし、神の定めた運命にしたがいながらも、自己に課せられた義務を主体的な意志によってはたす人間を描いた。また、[2]は『神統記』をあらわして、神話的表現を用いながら、宇宙の生成について統一的な説明を試みた。彼らの作品はギリシャ人の教養の基礎とされ、行動や思考の指針となった。

やがて、国政や行事にかんする自由な論議のなかで、ギリシャ人の知的探究心はしだいに養われ、神話による解釈を脱却し、人間の理性(ロゴス)にもとづいて真理を見いだそうとする学問的精神が生まれた。(b)彼らの態度をテオーリアという。テオーリアによって、自由に真理を求め愛するという愛知(フィロソフィア、哲学)の精神が育まれた。

問1 文章中の空欄 [1] ~ [2] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの

①~④のうちから一つずつ選べ。

[1]

①	ピュシス	②	プシュケー
③	カオス	④	コスモス

[2]

①	ツキディデス	②	ソフォクレス
③	アイスキュロス	④	ヘシオドス

問2 下線部(a)に関連して、ギリシャ神話の神についての記述として最も適当なものを、次の①~④のうちから一つ選べ。[3]

- ① 一般に掟に厳しく、人間の死後の世界の審判を与える。
- ② 一般に感情が豊かで、明朗な人間的性格を持っている。
- ③ 慈愛に満ちあふれ、つねに人間に恵みを与える。
- ④ 合理的な法則に従って判断し、つねに公平に人間を裁く。

問3 下線部(b)に関して、テオーリアの概念として**適当でないもの**を、次の①~④のうちから一つ選べ。[4]

- ① 実用的
- ② 普遍的
- ③ 静観的
- ④ 理論的

問2 下線部(a)をあらわすギリシャ語の用語として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[9]

- ① ログス ② アルケー ③ アレテー ④ ミュトス

問3 下線部(b)に関して、ミレトス学派の自然哲学者についての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[10]

- ① エレアのゼノン「アキレウスは亀を追い越せない」と語った。
② アナクシマンドロスは「万物は神々に満ちている」の言葉を残した。
③ アナクシメネスは万物の根源を「空気」であると考えた。
④ タレスは「あるものは有り、あらぬものは無い」と考えた。

問4 下線部(c)に関して、デモクリトスに関連した、自然哲学についての記述として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[11]

- ① デモクリトスと同様に、エンペドクレスは少ない種類の変化しない存在によって、生成変化する自然を解明しようとした。
② デモクリトスとは異なり、パルメニデスが真実の存在であると考えたのは、永遠に変化しない不消不滅の唯一の存在である。
③ デモクリトスと同様に、原子と電子の関係を数学的秩序で表そうとしたのがピュタゴラスである。
④ デモクリトス同様に、生成変化する自然を生成変化の中でとらえようとしたのがヘラクレイトスである。

問5 下線部(d)に関して、ゴルギアスの思想に関する記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[12]

- ① 魂は元来、不死すなわち神的な存在であるが、無知ゆえに肉体という墓に埋葬されている。われわれが生と呼んでいる地上の生活は、実は魂の死にほかならず、その死から復活し、再び神的本性を回復することが人生の目的である。
② 感覚でとらえられる世界は生成変化を続けるが、「変化」とは在るものが無いものになることであり、無いものが在るものになることである。理性で考えれば「無」から「有」が生じたり、「有」が「無」になったりするのは矛盾である。
③ 何も存在しない。たとえ存在するにしても、それについて知りうることは何もない。たとえ知りうることもあるにしても、それについての知識を他人と理解し合うことはできない。
④ ログスの支配は人事の場面のみならず、ひろく全宇宙に及んでいる。昼と夜とは明暗の形で対立し、人々はその区別にこだわるが、実は昼は夜に、夜は昼になるのであって、その過程を通じて両者は結合して一体をなしているのである。

第3問 次の文章を読み、下の問い（問1～問4）に答えよ。（配点 16）

『ソクラテスの弁明』によれば、ソクラテスの哲学的活動のきっかけとなったのは、彼の友人のひとりが [13] のアポロン神殿で、「ソクラテス以上に知恵のあるものはいない」という神託を得たことである。自分は知恵のある者ではないと自覚していたソクラテスは、この真意を探るため、自分より知恵のある者を見つけ出して、神託に反論しようとした。

だが、賢者として評判の高い人々を訪問し、問答をしたあとに、ソクラテスは次のような結論に達した。私たちは、どちらも、(a) 善美のことがらについては何ひとつ知らない。ところが、相手は知らないのに何かを知っていると思っている。自分は、知らないと思っている。この点において、つまり (b) 自分の無知を自覚しているという点で、自分は他の人よりもすぐれている。このことを無知の知という。

アポロン神殿には「[14]」という格言が刻まれていた。ソクラテスは自分にあたえられた神託をこの格言と関連させ、人間としてのあるべき生き方は、自己の無知を自覚し、無知であるからこそ知を愛し求めることにあつたのである。

真の知を得るために、ソクラテスは、ソフィストのように一方的に相手を説得しようとはしなかった。まず、相手が当然のごとくに知っていると思っていることを語らせてから、一問一答をくり返すなかで、相手の説明にふくまれている矛盾を指摘し、相手がみずから訂正するのを待った。このように、自分が無知であるかのようにふるまい、反対に相手の無知をさらけ出させることを [15] という。

[15] を出発点とし、ソクラテスは、問答をくり返すことにより、相手に無知を自覚させ、思索を深めさせて真の知にいたらしめた。この方法を、彼は問答法（助産術）と名づけた。この助産術ということばには、知を外から教えこむことはできず、また自分は知を教えるのではない、相手がみずから知を深めていくことの手助けができるだけであるという、ソクラテスの考えがあらわされている。

それでは、人間として求めるべき真の知とは何か。ギリシャ人には、あらゆるものにはそれぞれ固有の役割があるという考え方があり、その役割をはたすのに要求される資質・能力は、[16] とよばれた。ソクラテスは人間としての [16] を徳としてとらえ、人格・精神の優秀性であるとした。

そもそも、人間の徳とは何だろうか。ソクラテスは、善にして美なることを理想としたギリシャの伝統をふまえ、徳とは [17] をできるだけよいものにするものであると考えた。ソクラテスにとって、人間の [17] の本質は理性であるから、[17] をよいものにするには、理性がその固有の機能をよくはたすように心がけることである。また、理性の機能とは真理（知恵）を知るはたらきであるから、[17] をよくするとは、真理を愛し求めることにほかならない。

ソクラテスは、徳を知的な営みのなかで実現できるものと考えた。たとえば、勇気という徳をもつには、勇気について知らなくてはならない。徳とは何かを知ることなく、徳をもつことはできないのである。そして、真の知とは必ず実践へと向かうものであり、現実の行為と一体のものである。(c) 勇気について知っているとは、勇気ある行為ができるということである。こうした徳をもつことがよく生きることであり、幸福なのである。

問1 文章中の空欄 [13] ~ [17] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①~④のうちから一つずつ選べ。

- [13] [① オリュンポス ② デルフオイ
 ③ アテナイ ④ スタゲイロス

- [14] [① 過剰の中の無 ② 汝自身を知れ
 ③ 死を思え ④ 誓約と破滅は紙一重

- [15] [① エイロネイア ② エピステーメー
 ③ ディアレクティケ ④ フモール

- [16] [① アレテー ② アルケー
 ③ アパテイア ④ レトリケー

- [17] [① ピュシス ② ソフィア
 ③ ドクサ ④ プシュケー

問2 下線部(a)をあらわすギリシャ語の用語として最も適当なものを、次の①~④のうちから一つ選べ。 [18]

- ① カロカガティア ② エネルゲイア ③ スコレー ④ デュナミス

問3 下線部(b)に関して、無知の自覚に関するソクラテスの思想についての記述として**適当でないもの**を、次の①~④のうちから一つ選べ。 [19]

- ① 無知を自覚することによって、知の探究を始めることができる。
② 問いを重ねて吟味した結果の行き詰まりによって、無知を自覚することができる。
③ 無知の自覚から出発することによって、完全な真なる知恵に到達できる。
④ 知の探究は、人間の生ある限り終わることの無い営みである。

問4 下線部(c)に関して、これをあらわす言葉として最も適当なものを、次の①~④のうちから一つ選べ。 [20]

- ① 知行合一 ② 知徳合一 ③ 福徳一致 ④ 知先行後

第4問 次の文章を読み、下の問い(問1～問4)に答えよ。(配点 16)

真理を愛し求めたソクラテスの精神は、弟子のプラトンに受けつがれた。プラトンは [21] としての将来を嘱望されていたが、ソクラテスとの出会いと彼の不当な刑死を契機に、ポリスの再建をめざし、学園を設立して人々に教えを説いた。

ソクラテスが問答法によって求めたものは、人間としてよく生きるための徳についての真の知であった。プラトンもこの課題を継承し、真の知を愛するということは、[A] 的な真理を求めることであり、それを行うのは人間の理性の活動であると考えた。

真の知とは、永遠に変わらないものについての知である。私たちが日常において [B] 的に体験する事物は、たえず変化し不完全である。たとえば、数学において円や三角形を描いてその本質を論じるとき、描かれた円や三角形は多少なりとも不正確である。しかし、このとき私たちは、目の前にある図形を超えた、完全で不変な円や三角形そのものについて論じているのである。

このように、理性によってのみとらえることのできる完全な性質をもった「ものそのもの」を、プラトンはイデアとよび、『饗宴』や (a)『国家』のなかで論じている。彼は、とくに人間の勇気などの徳、美などの価値について、イデアの存在を説いた。彼によれば、イデアとは個々の事物が存する [22] を超えたイデア界に存在するものであり、事物・価値の理想的な原型である。このイデアを認識することこそ、学問の目的である。さらにプラトンは、さまざまなイデアのなかの最高のイデアを「[23] のイデア」とよび、これを [22] における太陽のように、イデア界に君臨する「イデアのイデア」としてとした。

人間の魂は、もともと不変のイデアの世界に住み、そこでイデアを見ていた。そのため、イデアの模倣である [22] のものを見ると、イデア界を [24] し、イデアにあこがれ、完全なもの、真に価値あるものに向かおうとする。このように、魂をイデアへと向かわせる情念を、[25] という。完全なものへの思慕である [25] は、人間の徳を向上させる原動力となる。プラトンは、この [25] によって魂をよいものにし、徳をみずからのうちに実現させる必要を説いた。

問1 文章中の空欄 [21] ～ [25] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

[21] [① 政治家 ② 資産家
 ③ 防衛者 ④ 哲学者

[22] [① 現象界 ② 叡智界
 ③ 理想界 ④ 地上界

[23] [① 美 ② 聖
 ③ 善 ④ 真

[24] [① コーラー ② アナムネーシス
 ③ アポリア ④ ミメーシス

[25] [① フィリア ② アガペー
 ③ エロース ④ パトス

問2 文中の空欄 [A] [B] に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。[26]

- ① [A] 普遍 [B] 形式 ② [A] 普遍 [B] 感覚
- ③ [A] 感覚 [B] 普遍 ④ [A] 感覚 [B] 形式
- ⑤ [A] 形式 [B] 感覚 ⑥ [A] 形式 [B] 普遍

問3 下線部(a) に関して、対話篇『国家』のなかで描かれている「洞窟の比喩」についての説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[27]

- ① 洞窟の中の人間はあたかも洞窟の中だけが世界のすべてのように誤解し、個人的な生活が一般的な常識であるかのような先入観を持っている。
- ② 人間はあたかも洞窟の中の囚人のように、体を縛られて身動きができない状態になっている。
- ③ 洞窟の中の人間は、太陽を見ることができないから、さまざまなものが投げかける影だけを真に存在するものと考えている。
- ④ この世界でアイデアを認識するためには、肉体という牢獄にとらわれ、その本来のはたらきを発揮することができないでいる人間の魂を解放しなければならない。

問4 同じく、対話篇『国家』のなかで描かれている、魂の三部分説の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[28]

- ① 人間が徳をもつとは魂をよくはたかせることであり、その魂のはたらきは、知恵・勇気・欲望の三つの部分に分けることができる。
- ② 魂をよいものとし、徳を備えるためには、アイデア界に属するものとして善に向かう理性が、身体に属する気概と欲望を導かなければならない。
- ③ 知恵は正しく善に向かうことで思慮の徳を、勇気は欲望を統制することで正義の徳を、欲望は理性にしたがい過度におちいらぬことで節制の徳を、それぞれ実現する。
- ④ この三つの徳が調和したとき、人間の魂はもっともよい状態となって、友愛の徳を実現することができる」と説いた。

問2 文中の下線(a)に関して、形而上学をあらわすギリシャ語由来の英単語を、次の①～④のうちから一つ選べ。[33]

- ① ontology ② metaphysics ③ psychology ④ philosophy

問3 文中の下線(b)に関して、アリストテレスのイデア論批判についての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[34]

- ① 本質的真実在はイデアの世界ではなく個物の中に内在する。
② 現実世界はイデアの世界ではなく仮象の世界である。
③ 本質的真実在の世界にこそイデアは存在する。
④ イデアのような本質的真実在はどこにも存在しない。

問4 文中の下線(c)に関して、幸福と訳されるギリシャ語として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[35]

- ① カタルシス ② アントローポス ③ エウダイモニア ④ メソテース

問5 文中の下線(d)に関して、学問的知識でも技術でもない、実践的知性であるところの知性的徳をあらわすギリシャ語として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[36]

- ① ソフィア ② フロネーシス ③ ディアレクティケー ④ テクネー

問6 文中の下線(e)に関して、アリストテレスが語ったポリスの共通の利益を目的とする正しい政治形態として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[37]

- ① 貴族制 ② 民主政 ③ 共和制 ④ 王政

問7 文中の下線(f)に関して、アリストテレスによる「**配分的正義**」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。[38] (92年センター本試験より)

- ① 理想的な国家を実現するために、国家を構成する三つの階層がそれぞれ自分に与えられた仕事や本分を果たすこと。
② 利益のあくなき追究をその本性とする人間が、自分の財産や権利が損なわれるのを恐れて、互いの間で約束を取り結ぶこと。
③ それぞれの国家を支配するものが、自らの利益になることをめざして制定した法律に、人々が従うこと。
④ 取引や契約その他、人と人との間のあらゆる利害関係において生じた各人の損失と不当な利得を、補償や処罰によって復元すること。
⑤ 一つの共同体を構成する人々の間で、その能力や業績などに応じて、それにふさわしい名誉や財産を振り当てること。
⑥ 個人の間様々な差異を一切考慮に入れないで、各人の地位や罪科の均等な状態を実現すること。

第6問 次の文章を読み、下の問い(問1～問4)に答えよ。(配点 12)

公的生活と個人的生活が一致していたポリスの崩壊によって、ギリシャ人たちは、広大な世界国家の一員として生きることとなった。そして、ポリスというよりどころを失った人々は、幸福を個人的・内面的な自由と平安に求めるようになった。このような時代を代表する思想が、ストア学派とエピクロス学派の考えである。

(a)キプロスのゼノンによって創始されたストア学派は、「自然と調和して生きる」ことを理想と考えた。自然は、(b)ロゴスによって支配された世界であり、人間にもこの種子が宿っている。そして、自然をつらぬく法則と一致するように理性的に意志をはたかせることによって、魂の内的な調和の状態が得られる。これは、死の恐怖や怒り、驚きなどの情念に動かされることのない、[39]にほかならない。この境地こそ人生の目的であり、幸福すなわち最高善である。この立場を禁欲主義という。

これは、理性によって心の安らぎを保ち、自足することが幸福であるという考え方であり、また、理性をもっているかぎり人間はすべて世界市民として同胞であり、平等であるという思想である。この世界市民主義は、のちのキリスト教や、さらには近代の(c)自然法思想にまで影響をあたえることになった。

ストア学派の禁欲主義に対し、エピクロスは快樂が最高善であり、それを追究することのなかに人生の目的としての幸福が見いだされると考えた。この立場を快樂主義という。しかし、エピクロスは、たんに瞬間的で感覺的な肉体の快樂を求めたのではない。それらは、外界への依存によって得られ、結果的には苦痛をもたらすから、真の快樂ではない。真の快樂とは、肉体の苦痛も魂の苦悩もともなわず、すべてにおいて満足感を得ることである。ここにこそ、肉体や死の恐怖にわずらわされない [40] があり、欲望に支配されない自己充足がある。

このような永続的で安定した精神的快樂を求めた彼は、[41] と説き、「エピクロスの園」といわれる学園を開いた。そこは、彼と同じ理想を求める人々が性別や身分を超え、節制と勇気と思慮にもとづいて生活する友愛の共同体であった。

問1 文章中の空欄 [39] ～ [41] に入れるのに最も適当なものを、次のそれぞれの①～④のうちから一つずつ選べ。

- [39] [① アウタルケイア ② アパテイア
 ③ コスモポリタン ④ アタラクシア

- [40] [① アウタルケイア ② アパテイア
 ③ コスモポリタン ④ アタラクシア

- [41] [① パンタ・レイ ② ゴーン・ポリティコン
 ③ グノーティ・サウトン ④ ラテ・ビオーサス

問2 下線部(a)に関して、キプロスのゼノンがかつて所属していた学派として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[42]

- ① アカデメイア派 ② キュニク派 ③ ペリパトス学派 ④ 新プラトン派

問3 下線部(b)に関して、この文脈におけるロゴスの訳語として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[43]

- ① 言葉 ② 理法 ③ 理性 ④ 論理

問4 下線部(c)に関して、自然法思想に影響を与えた次の文の著者として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。[44]

もし叡智が我々に共通なものならば、我々を理性的動物となすところの理性もまた共通なものである。であるならば、なすべきこと、なしてはならぬことを命令する理性もまた共通である。であるならば、法律もまた共通である。であるならば、我々は同市民である。であるならば、我々は共通にある政体に属している。であるならば、宇宙は国家のようなものだ。人類全体が他のいかなる政体に属しているといえようか。我々はこの共同国家から叡智的なもの、理性的なもの、法律的なものを与えられているのである。

『自省録』

- ① セネカ ② キケロ ③ エピクテトス ④ マルクス=アウレリウス

第7問 次の文章を読み、下の問い（問1～問6）に答えよ。（配点 12）

キリスト教は、古代イスラエル人の民族宗教であるユダヤ教を母胎としている。パレスチナ地方に移住して遊牧生活をしていた古代イスラエル人たちは、幾度となく他民族の支配を受け、流浪の生活を余儀なくされた。

この苦難に満ちた体験のなかで、彼らは民族の団結と再生の中心となる超自然的な存在を求め、その権威への信仰によって、民族の将来に希望をつなごうとした。こうして生まれたのがユダヤ教である。

ユダヤ教は、(a)宇宙万物を創造し、支配する人格神ヤハウェが、(b)イスラエル人をみずからの民として選び、彼らを永遠の救いに導く約束をしたと教える。救済されるためには、神の意志として示された律法をかたく守らなければならない。

『旧約聖書』によれば、紀元前13世紀ごろ、(c)神の導きを受けたモーセに率いられてエジプトを脱出したイスラエル人たちに、シナイ山でモーセを通じて神から律法が授けられた。これが「モーセの十戒」である。十戒は、神の唯一絶対性を示す宗教的規定四戒と、人間本来のあり方を示す道徳的規定六戒とから成り立っている。この律法の根底にあるのは、律法にしたがって人間本来のあり方を忠実に守れば、人間は義人として生きることができるのであり、しかもそのことに民族の存続がかかっているという教えである。律法にそむけば、ヤハウェは「裁きの神」としてきびしい審判を下すのである。こうして、絶対者によって決められた掟を守ることで、未来におけるみずからの救済を期待するという(d)律法主義の考え方が生まれた。

ヤハウェ信仰によって強固な共同体として統合されたイスラエルの民がカナンの地（パレスチナ）に築いた王国も、(e)その後南北に分裂して他国に滅ぼされ、紀元前6世紀ごろ、老人と子どもを除くイスラエル人はバビロンに連れ去られた。

神の声を伝える預言者のひとりエレミヤは、苦難の日々をおくるイスラエル人に、律法を守らなかった人々に対する神の罰がこの捕囚の悲運であると伝えたが、同時に、神はイスラエル人の不義を許し、(f)メシアをこの世におくであらうと預言した。人々のあいだには、それまでの生き方を悔い改めて神の意志を行おうという意欲が高まっていった。やがて捕囚から解放されると、人々は故郷の地エルサレムに神殿を再建し、「モーセの十戒」を根本とする戒律のきびしい教団を創設した。パリサイ派の律法学者やサドカイ派の祭司たちは、律法の厳守を説いて尊敬を集め、人々はメシアの到来を期待しながら律法を守った。

問1 下線部(a)に関して、旧約聖書の創世記に関する記述として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[45]

- ① 神は自分をかたどって男と女を創造した。神は人を祝福して言った。「生めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせ、すべての生き物を支配せよ。」
- ② 神はエデンに園を設け、美しく食料となる樹を生えさせ、人を住ませた。第7日神は仕事を離れ安息した。そのため神は、人も週末の日曜日には安息することを命じた。
- ③ 善悪を知る木の実を食べたことを知った神は怒り、女には生みの苦しみを、男には食べ物を得るための苦しみを与えた。楽園を追放された二人は死の支配を受けることになった。
- ④ やがて洪水が起こり、水は40日間地上を覆った。すべてが終わったとき、ノアたちだけが残った。箱舟をでたノアは祭壇を作った。神はノアとその子らに「生めよ、増えよ、地に満ちよ。」と祝福した。

問2 下線部(b)に関して、創世記の中で、はじめに神と契約を結んだといわれるイスラエルの民の祖、信仰の父として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[46]

- ① イサク ② ヤコブ ③ アブラハム ④ カイン

問3 下線部(c)に関して、ユダヤ教徒にとっての出エジプトの意味として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[47]

- ① 神がイスラエルの民の歴史に介入し、奴隷から解放してくれたということ。
② モーセこそイスラエルの民にとっての救い主であるということ。
③ エジプトも神とイスラエルの民の間に交わされた契約の土地であること。
④ 出エジプト以来、イスラエルの民は常に神に忠実であったということ。

問4 下線部(d)に関して、律法についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[48]

- ① 神がイスラエルの民に与えた十戒のこと。
② モーセ五書ともいわれる旧約聖書最初の5巻のこと。
③ 預言者が神から預かった預言の言葉のこと。
④ それを守らなければ教会から破門されてしまう掟のこと。

問5 下線部(e)に関して、古代イスラエル王国が分裂する直前の王で、主の神殿をエルサレムに建てた人物の名前として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。[49]

- ① ソロモン ② サウル ③ ダヴィデ ④ ネブカドネザル2世

問6 下線部(f)に関して、メシアについての説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。[50]

- ① ヘブライ語で「油を注がれた者」の意味
② ヘブライ語で、「王」の意味ももつ
③ ギリシャ語では christos と訳される
④ ラテン語では IESUS と訳される

これで問題は終わりです。